# 非暴力平和隊・日本(NPJ) ニューズレター

第84号　　2022年12月7日発行

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 1 階 A 室
スペース御茶ノ水気付 非暴力平和隊・日本

Tel：080-2678-5973 E-mail：office@np-japan.org
Website：http://np-japan.org/

## Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

・【巻頭言】「平和主義」を問い直すウクライナ侵攻問題　理事　青山　正　２
・軍事予算の膨張に反対　事務局長・理事　安藤博　５
・【NPJ ユースチーム】沖縄フィールドトリップ報告
インターン：成澤希羅利、川本梨央、高野瑛世、遠藤あかり　６
・新理事就任あいさつ　徳留　由美　１４
・ニュースレター編集担当を終えて　理事　大橋祐治　１６
・2022 年度上期予算・実績（暫定）　理事　大橋祐治　１７
・沖縄報告　共同代表　大畑　豊　１８
・カンパ御礼　２０

【ウクライナ Kharkiv で破壊されたビルの前を歩く NP 護衛スタッフ】

【巻頭言】

# 「平和主義」を問い直すウクライナ侵攻問題

NPJ 理事　青山　正

今年の２月 24 日にロシア軍のウクライナ侵攻が始まりました。早くも 10 か月目に入っています。もとよりこの侵攻は明白な国際法違反であり、ましてや国連の常任理事国であるロシアによるこの暴挙は許されるものではありません。

この問題を巡って国内では様々な考え方が出されました。その中で私は一部の政治・平和学者や護憲リベラルあるいは反戦平和を掲げてきた人びとから出されてきた意見・主張に対し、大きな違和感を抱かざるをえませんでした。そしてそれは日本の「平和主義」というものの根本に関わる問題をはらんでいるのではないかと思うようになりました。

私はこれまでこの紙面でも報告してきているように、チェチェン戦争の問題に長い間関わってきました。チェチェン戦争は 1994 年から始まった第１次と、1999 年に始まった第２次に分かれますが、この二つの戦争を通して人口 100 万人ほどのチェチェン共和国において、実に 20 万から 25 万人もの市民が侵攻したロシア軍により殺されています。これはすさまじい規模の殺戮ですが、残念ながら国際社会からはほとんど無視されてきました。その中でロシア軍はチェチェン人への拷問・虐殺・略奪・女性への性暴力などやりたい放題の暴力の限りを尽くしてきました。これはまさに今ウクライナで起こっているロシア軍の戦争犯罪とまったく同じです。ロシア軍の暴力性は昔からまったく変わっていないのです。

そしてチェチェン戦争、とりわけ第２次チェチェン戦争の進行とともに、プーチン大統領の強権的な政治がロシアで進み、その中で多くのジャーナリスト・人権活動家、野党政治家などが暗殺されたり、拘束されたりして言論の自由や民主的な政治が奪われていきました。プーチン大統領は今回のウクライナ侵攻を経て、完全に非民主的な独裁体制を完成させたと言えると思います。

このような現実にもかかわらず、この間日本の中で「平和」サイドにいたはずの人々の間から、プーチン大統領やロシアではなく、ウクライナやゼレンスキー大統領への批判が出されています。これは実に信じがたいことです。国際法を無視して一方的に侵略し、数々の戦争犯罪を繰り返しているロシア側ではなく、侵略の被害を受けているウクライナ側をどうして批判するのでしょうか。それが本当の「平和主義」でしょうか。

例えば、ゼレンスキー大統領の出したウクライナの成人男性の出国禁止などの政策を批判していますが、それは決して全員を無理やり戦場に送り込んでいるわけで

はありません。ウクライナ軍に入隊しているのは成人男性の３パーセントに過ぎません。

出国禁止に反発するウクライナ人がいるのは当然かと思いますが、一方でそれ以上に多くの海外に住んでいたウクライナ人が自主的に帰国して、自国の防衛に参加している事実も無視できません。私は侵略の被害者であるウクライナ側がすべて「善」であるとは必ずしも思いませんが、一方でプーチン大統領とロシア軍の戦争犯罪は絶対に許せないことであり、ウクライナ侵攻を止めることは国際社会の責任であると考えています。

ウクライナ側を批判する人々の主張は、結局プーチン大統領のプロパガンダに完全にはまっているとしか思えません。ある社会問題で私も敬愛する方が、ウクライナ問題で発表した文章を見て、私は驚愕しました。その方は、「 今回ロシアがウクライナへの攻撃に踏み切った理由は２つある。一つは 1991 年にソ連が崩壊し、同時に軍事同盟であるワルシャワ条約機構を解体したのに対して、西側の軍事同盟である NATO（北太西洋条約機構）はそのまま生き延びた上、ワルシャワ条約機構に属していた国々を次々と取り込み、ウクライナすらが NATO に加盟しようとしたことである。

二つ目は、ウクライナという国の内部の問題である。選挙で正当に選ばれた親ロシア政権を 2014 年の武力クーデターで倒した親西欧政権が脱ロシア化を進め、国内でロシア語を使うことを禁じた。言語の使用を禁じることは、そこで育ってきた文化そのものを潰すことで、犯罪と呼ぶべきことである。ドニエプル川東岸は親ロシア人が多く住む地域で、抵抗する住民に対して、ウクライナ政府はネオナチの私兵・アゾフ大隊を使って暴力的に弾圧した。そのためドイツとフランスの仲介の下、東部の州に対して自治権を与えるべきだという『ミンスク合意』が 2014 年と 2015 年に成立した。しかし、ウクライナ政府はそれを守ろうとしなかった。文化を破壊され、差別され、武力攻撃を受ける東部の住民たちはロシアに助けを求めた。」と主張しています。

これはまさにプーチン大統領の一方的なプロパガンダに他なりません。それらは事実を大きく歪曲したデマです。本当に信じがたいことでした。ある問題では極めて原則的で的確な主張をしている方が、このようにいとも簡単にデマに染まってしまうというのは、とても恐ろしいことです。

その原因のひとつは、本来は市民サイドだったはずのいくつかの情報サイトが、プーチン大統領のでたらめなプロパガンダを垂れ流している現状があるかもしれません。あるいは欧米の高名な学者などのひどい学説に影響されているのかもしれません。

いずれにせよまったく事実に基づかず、侵略の被害者であるウクライナをバッシングするということは、「平和主義」とは何の縁もあるはずがありません。たとえウクライナ側が自らの信念と違って、武装抵

抗しているからと言って、事実ではない理由を用いて非難するというのはおかしなことです。どのような抵抗をするかは、ウクライナの人々が決めることです。

またウクライナ側に早期停戦や、さらには降伏すら呼びかける人々もいます。しかし第２次チェチェン戦争が起きたのは、まさにロシアとの停戦中でした。実際はロシアの情報機関であるFSBが実行したモスクワのアパート爆破事件を、一方的にチェチェン側のテロだと決めつけて、ロシア軍はチェチェンへの無差別攻撃を開始しました。停戦は決して平和を保証するものでありません。しかもウクライナのロシア軍占領地のブチャなどで明らかとなったように、ロシア軍の支配地では無抵抗の住民がむごい拷問の末虐殺されたり、女性たちが性暴力を受けたりする悲惨な事例が相次ぎました。降伏しても悲劇が終わるわけではないのです。

私はウクライナ問題を考えるために、プロパガンダに左右されずまず事実をきちんと確認し、加害者ではなく被害者の側の声を聴くことが大切だと思っています。戦争犯罪を決して許さず、侵略に苦悩する側に寄り添う「平和主義」であるべきではないでしょうか。表面的で形ばかりの薄っぺらな「平和」ではなく、より人間的で本質的な「平和」が今求められているのではないかと、ウクライナ問題を通して私は思うようになりました。私の考えが絶対正しいとは思いませんが、事実を探り、苦難する人々へ寄り添うものであってほしいと思います。

ウクライナ侵攻はロシアの人々にとっても大きな不幸です。この秋には 30 万人を超えるロシアの男性が強制的に動員され、ほとんど訓練も受けず、大した装備もないまま、ウクライナの戦場の最前線に送り込まれて、盾として無残に殺されています。背後にはロシア軍の督戦隊が控え、逃亡や降伏する動員兵に銃撃を加えるという悲惨なことになっています。ロシアの人々のためにも、ロシアは今すぐ戦闘を停止し、ウクライナから撤退すべきです。それこそが平和への道だと私は思います。

【青山正・著、同時代社、2022/5/12 発行】

# 軍事予算の膨張に反対

NPJ 理事　安藤　博

「有事」とは、戦争が起こっている状態を言います。「台湾有事」「朝鮮半島有事」と言えば、日本に近い地域が戦争状態になっていることです。有事に対して「平時」という言葉があります。戦争状態でないふつうの状態のことです。しかし、「歴史が始まって以来、今日に至るまで、戦争が終始人間の常態であった、むしろ平和な時代こそが例外」と大著『戦争の世界史大図鑑』(R.G.グラント編著）の序文に記されています。

二度の世界戦争を経て、戦争は国際法上違法なものとなっているのですが、今年2月24日ロシア軍がウクライナに攻め込んだことで始まったウクライナ戦争によって、世界は第一次世界戦争以前のように戦争が国家の日常的仕事であった時代に逆戻りしてしまいそうです。

＜国力としての防衛力を総合的に考える有識者会議＞は11月22日「敵地攻撃能力の保有が、抑止力の維持・向上のため『不可欠』だ」という報告書を岸田政権に提出しました。攻撃されるのを待つことなく先制攻撃で敵のミサイル発射根拠地をたたくという自民党タカ派年来の主張に、お墨付きを与えるものです。「有事」が明日にでも迫っているかのように、11月28日岸田首相は防衛費を5年間で2倍(GDP比2%)にすることを蔵相、防衛相に文書で指示しました。大詰めを迎えようとする2023年度予算の編成作業は、戦争が文字通りふつうのことであった第二次大戦前のようになろうとしています。

それにしても「有識者」とはどういう知識を有している人たちなのか。日本にミサイルを突然打ち込むというのは狂気の沙汰であって、それを防ぐことなどできるわけがない。「抑止力の維持・向上のため」、つまり（攻撃を止めさせるための）武力による威嚇が憲法9条で禁じられているということ以前に、ふつうの常識で考えて無理なことです。第一次安倍政権で安全保障・危機管理担当の内閣官房副長官補佐を務めた柳沢協二さんは「敵地攻撃のポイントは、相手の第二撃から、いかに自分を守るかにあり・・・相手からの反撃を防ぐには、全てのミサイルを破壊しないと意味がありません・・・それは不可能です」と言いきっています（『朝日新聞』2022/11/12「耕論」）。ほんとうに有事となったら命を投げ出すことを宣誓していた元防衛官僚が言われることだけに、実感がこもっています。

非暴力で平和を守ることがますます難しくなっています。取りあえずは、実効性のない空論で軍事のための国費を膨脹させていくことに強く反対していかねばなりません。

【NPJユースチーム】

# 沖縄フィールドトリップ報告

**「色んな視点から**
**見る･感じる沖縄」**
**成澤希羅利**

会員の皆様への自己紹介が遅くなってしまいました。昨年の秋からNPJのインターンとして仲間に加わった成澤希羅利です。現在、ドイツ・ベルリンにあるデザインの大学に通っています。大学で学んでいることを活かし、NPJの活動のひとつとなったYouTubeのNPJカフェではサムネイルを同じくインターンの髙野と交代で作っています。以前配信した「ウクライナ人道支援の現在」にも出演させて頂き、ドイツから見た人道支援や、実際に私の身近にいるウクライナから避難してきた友人にインタビューした内容を皆さんにシェアさせて頂きました。この回は、他の団体の活動を知り、交流できたとても貴重な機会だったと思うので、これからも私なりに自分にしかできないような形でNPJに貢献していきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願い致します。

本題に入りまして、私たちNPJユースチームは、8月30日から9月1日の２泊３日の沖縄フィールドトリップに行きました。その沖縄フィールドトリップについてこの場をかりて報告致します。私自身、ずっとドイツにいたのでみんなの顔は画面上でしか見ることができなかったのですが、今回夏休みで日本に一時帰国したので、そこでスケジュールを組んでもらい参加することが出来ました。初、フェイスtoフェイスでみんなと会うことができたのでとても嬉しかったです。生憎、台風と重なってしまい、計画した場所に行くことができなくなってしまうのでは。と、ハラハラした気持ちでいたのですが、意外にもたくさんの場所へ行くことができ、たくさんの人からお話を聞く機会を得ることができました。そして、忙しい中運転から案内、何から何までお世話をしてくれた大畑さんと安藤さん、そして一緒にたくさんの良い刺激を受け、勉強したユースのメンバーにとても感謝しています。

私はこれまで沖縄に3回ほど訪れたことがあり、その１回は中学校の修学旅行でした。沖縄の歴史を学び、語り部さんが当時の戦争の酷さ、醜さを教えてくれたことが今でも印象に残っています。

1日目の最初に訪れたのが平和記念資料館。そこには沖縄戦争を経験した数多くの人たちの証言映像や文

章、当時の写真など生々しく、受け入れ難いような内容の事実が展示されており、一つ一つが心にずっしりと重く乗ってくるような気分になったのを覚えています。そして私たちは資料館から望む海を見て歩きながら、平和の礎へと辿り着きました。そこには沖縄県出身の人だけでなく、沖縄戦で亡くなったすべての人々の名前が刻まれており、その礎はどこまでも、どこまでも連なっていて“平和の尊さ“を感じました。その後に訪れたひめゆりの塔・ひめゆり平和記念資料館では、現在の私たちより遥かに若い（15歳～19歳）学生たちが当時の負傷者たちの看護をしていた事実、実際に使われていた現物、病院壕のジオラマなども展示されていて、当時の壮烈な生活環境を想像する事ができました。

２日目は、嘉数高台からスタート。風は強かったのですが、運よく晴れていました。そこからは普天間基地が見渡せて、実際に見てみて、住宅街との境目というのが殆どなく、誰がみてもわかる危険さや、近隣住民にとっては基地があること自体が大変迷惑であろうことが想像できました。この状況が長年変わらないというのも、沖縄に住んでいるこの実情に悩まされている人たちに対して不甲斐なく思えました。そして、佐喜眞美術館。そこには平和への思いや沖縄戦を連想させる作品ばかり展示されていて、コミュニケーションデザインを勉強している身として、とても興味深く、強いメッセージ性を持った作品がたくさんありました。嘉手納基地を見渡せるような施設では、展望台に騒音計もあって戦闘機などが飛行・着陸するときの音のレベルもリアルタイムで確認することができます。

最終日は座り込みに参加する予定だったのですが、惜しくも台風の影響でキャンセルとなったので、過去の座り込みの映像や阿波根昌鴻さんの言葉などをビデオ資料で勉強させてもらいました。座り込みの映像は想像していたものよりも遥かに命懸けな様子が見受けられて衝撃的でした。

最近、ネット配信サービス「２ちゃんねる」創立者のひろゆきさんがTwitterで辺野古の座り込みなどについて発信したことが話題となりました。内容を簡単に説明すると、彼が10月に沖縄を訪れた際に、基地移設反対派の人たちが作った「新基地断念まで座り込み抗議　不屈　3011日」と書かれている看板の隣で、笑顔でピースサインをしている彼自身の写真と、「座り込み抗議が誰も居なかったので、0日にした方がよくない？」という言葉をTwitterに投稿しました。その情報を受け取る側によっては基地反対運動に無理解なように捉えられたり、嘲笑しているような態度にも見えたりして、ひろゆきさんを批判する声や、反対に擁護するような書き込みもありました。沖縄の基地反対運動に対して対立する両者の意見が浮き彫りになりました。その投稿の後に、ひろゆきさん

が座り込み抗議をする方達と実際にコミュニケーションを図ろうとするも、ヒートアップしてしまい議論が成立しない・・・という動画もインターネットに上がっています。ここでひろゆきさんが伝えたかったこととして、“座り込み“という言葉の定義は辞書では「その目的を達成するまでその場所に居続けて離れないこと。」を意味しているので、“座り込み“という言葉の認識を問うような含みがあったことがわかっています。この一連の事を通して、異なる意見を持つ人たちの歩み寄る姿勢が見られなかったり、対話する時に冷静さを欠いていたりしたため、今回のYouTubeなどに上げられた討論の動画炎上が起こったのだと思いました。これはあくまでも私の感想なのですが、討論やTwitterにあげた内容はともかく、発信力のある彼が沖縄の基地問題について取り上げてくれたことによって、世間からの大きな関心が寄せられることになったので、かえって、国民がまた沖縄基地問題について考える場がつくられたことは良いことだったのでは、と思いました。世間では賛否両論ある様なのですが、“基地問題”、“座り込み”、“構造的差別”など、今まで知らなかった人や興味関心すらなかった人たちの注目を集める絶好の機会だったのではないでしょうか。

　最後に、私は無知であることは時に罪なことであると思っているので、9月のNPJカフェでも申したとおり、そうならない為にも常に情報収集のアンテナを張り巡らせることが大事です。そして１つだけのリソースではなく複数のリソースから情報を得て判断すると良いと改めて思いました。ここで大切になってくるのは、ひろゆきさんの辺野古の件でもあったように、双方の異なった意見に対してどちらが正しい、間違っているなどを決めるのではなく、歩み寄る努力をする事と思いやりの気持ちを持つことだと思います。そうすることでお互いに理解が深められるのではないでしょうか。自身が得た知識を身近な人たちからでも、シェアして発信していくとバタフライ効果が生まれるかもしれませんね。なので、これからも沖縄問題を人ごとにせず私たちの身近なトピックにしていくことにも力を入れたいと思います。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

**「人と繋がり近くに**
**沖縄を感じること」**
**川本梨央**

　非暴力平和隊・日本でインターンをさせていただいております、川本梨央です。現在立命館大学産業社会学部の二年生です。もともと環境問

題に関心があった一年生の私ですが、偶然受講していた君島東彦先生の講義で平和活動に興味を抱きました。そんなとき、君島先生からNPJの活動に参加してみないかとお声がけいただきました。その際、国際NPについて調べ、対立は防ぐことはできないが暴力は防ぐことができるという一文に惹かれ、インターンとして活動に加わることを決意しました。

NPJの活動を通じて、平和と環境問題の関連について意識するようになり、より広い視野で、多角的に環境問題に向き合うようになりました。実際、世界では人口増加や経済活動の活発化、加えて気候変動の影響で水不足が深刻化しています。水資源は紛争の引き金となるため、水不足が深刻になるにつれ紛争も増加しています。NPJの活動を通じて平和や紛争解決について学ぶことは、環境問題に取り組むうえでも非常に重要なことであると感じております。将来は、環境問題に対する取り組みを通じて、世界で起きている不公平を少しでも是正したいと考えています。

さて、自己紹介が少し長くなってしまいましたが8月30日から９月1日にかけてNPJユースで沖縄に行って参りました。現地では、共同代表である大畑さんと理事の安藤さんが案内してくださいました。

まず沖縄に着き感じたことは、いかに沖縄の土地を占めている米軍基地の割合が多いか、です。現地では車で移動しておりましたが、窓から見える景色の多くは米軍の土地であり、基地があるため迂回しなくてはならなかったり、線路が引けないため車社会であったりすることなどを知りました。改めて、ほんの一部かもしれませんが、沖縄の人がこれらの負担を受けざるを得ない理不尽な状況を肌で感じました。

また、実際に沖縄に赴くことで、人とのつながりの大切さを実感しました。沖縄では、ひめゆり平和祈念資料館の学芸員さんをはじめ、佐喜眞美術館の館長さん、偶然出会ったカメラマンさんなど様々な方からお話を伺うことができました。戦争や現在の基地問題、そして平和について様々な人の思いや歴史を含めながらも、まっすぐに見つめる難しさ大切さを感じました。宿泊先は抗議活動のベースの場ともなっており、実際に活動している方々とお話することができました。そこでは、実際の抗議活動から他愛のない話まですることで、人とのつながりを感じました。人とのつながりを通じて、沖縄で起きている様々な問題や不公平をより自分事として捉えられるようになりました。さらに宿泊先には、沖縄問題にまつわる書籍や映像が数多くあり、人が集まり、勉強をしたり、対話ができる場として機能していました。このような場所を通じて他に活動する若い世代とのつながりも作り出せたらとても素敵だなと思いました。

この沖縄フィールドトリップで特に印象に残っているのは、ひめゆり

平和祈念資料館です。私と同じ年代の彼女たちが戦場にいき過酷な状況で看病をしていたということが、今の私の状況とあまりにもかけ離れており想像を絶するものでした。様々な展示や証言の映像がある中で一際印象に残っているのは沖縄戦で犠牲となった教師や学生の遺影と共に添えられていた周りからみた人物像と亡くなった経緯が記されたものです。想像を絶する戦争を経験した学生たちが、本来は私と同じような学生であり、好きなこと、得意なことがあり、誰かの友達であることを感じることで、想像でしか知らない戦争を近くで感じました。このような事を二度と起こしてはいけないと強く感じました。また平和を継承していくには、世代間を超えて戦争を語り継ぎ、平和を築く努力をしなくてはならないことを痛感しました。私自身もこの沖縄フィールドトリップで感じたことを周りに共有していくことから始めたいと思います。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

**「沖縄フィールドトリップを経て」**
**インターン：高野瑛世**

初めまして、高野瑛世と申します。同志社大学で心理学を学んだ後、現在多摩美術大学でグラフィックデザインを学びながらNPJのインターンに参加させていただいております。ロゴのリニューアルやSNSでの発信・Webページの制作に関して、成澤とともにデザインを担当しております。広告業界に興味があり、興味のない人にいかに興味を持ってもらうか、ポジティブなイメージを持ってもらうかを考えて日々勉強しております。

先日、インターン活動の一環として沖縄フィールドトリップに参加させていただきました。大畑さんに現地を案内していただき、平和祈念公園やひめゆりの塔、米軍基地などを見て回りました。中学校の修学旅行でも沖縄を訪れていたのですが、自分の年齢が変わったこともあって新鮮な感覚で向き合うことができました。その中で強く感じたことが３つあります。

一つ目に、絶対に戦争をしたくないという思いです。当たり前ではありますが、普段生活をする中で戦争は縁遠いものであり、ニュースで見かけることがあっても遠い外国での話や数字の羅列を自分ごと化するのは私にとってなかなか難しいことです。しかし、当時の資料で自分たちと同じ年やもっと幼い子供までもが戦争で戦ったり、巻き込まれている様子を見て、戦争の凄まじい悲惨さと狂気を強い現実感と共に感じました。しかも、まさに自分が立っているこの場所が戦火の中心であったことを思うと、身の毛がよだつ感覚に襲われました。現在はインターネットで調べればなんでも分かる時代だと言われていますが、実感を伴った理解は実際に現地に赴かないとできない体験であり、大きな収穫であったと感じています。

二つ目に、事実を残すこと、把握することの難しさです。戦争に関する資料の中でも、日本兵が避難場所であったガマの中で一般市民を守ったという

意味の展示から追い出そうとしたという意味に変更されたものがあったそうです。しかしそれも場面や人が違えば異なる内容だったこともあった可能性もあり、どちらが正確なのかは判断の難しい問題です。現在はまだ当時を経験された方がご存命のため、その証言を繋ぎ合わせて当事を想像することができますが、その方々がいなくなった後、人伝でしか戦争を知らない世代だけになった時に、何が事実だったのかは更に分からなくなっていくのではないかと思います。さらに、現在ですら何が起こっているのか理解することは難しいとも感じました。普天間基地の近くの公園を見学していた際にカメラマンの方と遭遇したのですが、その方のお話はこれまで聞いてきたものと全く違う内容でした。その内容とは「基地があるから地域が潤い、そこに集まるように住民が移り住んできている。基地を迷惑がっている人だけではない」というものです。これが正しいかどうかは分かりませんが、こう発言される方がいらっしゃったのは事実であり、何を持って一般市民の総意とするか、どう客観性を担保していくのかは平和活動を行う上で忘れてはいけない問題だと感じました。

三つ目に、伝え方の問題です。今回沖縄で感じたのは、沖縄県とそうでない都道府県との熱量や感覚の違いでした。沖縄の人々は戦争や基地に対して押し付けられている、被害者である感覚を強く持っているのに対し、そうでない人々は特に加害者意識もなく、他と同じ47都道府県の一つとして認識していることが多いのではないかと思います。その感覚の差から、沖縄県からは「責任を持ってヤマトは沖縄の問題に取り組め」というメッセージが発せられるのですが、他の都道府県の人々からすると自分が加害者だとも感じていないため、前提が違いすぎて伝わらなかったり、逆に反感を持ってしまうこともあるように見受けられます。これはこのケースに限らず、人権問題や環境問題においても同じような問題が見られます。そうならないために、自分と相手の状況を理解した上で、どんなコミュニケーションをとるべきか考えて伝えていくことが課題ではないかと感じました。

最後に、今回沖縄フィールドトリップに行かせていただいたことで、頭だけでなく体でさまざまな情報を感じ、より自分ごととしてどう平和問題を考えていけばいいのか掴むことができました。この経験を自分のこれからの活動や仕事にしっかりと活かしていきたいと考えています。案内していただいた大畑さん、安藤さん、支援していただいた会員の皆様には感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

**「沖縄フィールド**
**トリップを終えて」**
**遠藤あかり**

2022年夏、沖縄フィールドトリップに参加した。NPJユースチームとして感じたことをここに報告したい。

私にとって沖縄訪問は今回が初めてであった。沖縄といえばリゾート地として有名であると同時に、1945年の大戦で大きな犠牲を出したこと、米軍基地問題などが思い出される。

NPJユースチームは2泊3日を通して沖縄の過去と現在をたどった。まず、平和記念資料館、平和の礎、ひめゆり平和記念資料館をめぐり、沖縄が経験したことをみた。これらの資料館は特に戦時中市民がどのような犠牲を払ったのか、戦火の沖縄をリアルに伝える映像、資料が展示されていた。例えば、ひめゆり平和記念資料館には、1945年当時15歳から19歳の生徒たちが看護活動をするために沖縄陸軍病院に動員された記録や、生き残った学生がのちに撮った証言ビデオなどが残されていた。これは私自身の平和を考えるときの出発点であるが、強調したいのは「個」の存在を忘れない重要性である。戦争や武力紛争を考えるとき、もしくはそれらを教えられるとき、犠牲になった人の数に注目が集まることがしばしばある。今回訪れた沖縄県平和記念資料館によれば、沖縄戦による死亡者数は20万人を超える。[1]人口15万人の山形県鶴岡市で育った私からすれば、この20万という数字は衝撃的であると同時に、沖縄戦が悲惨なものであったと簡単に言えてしまう。しかし、実際に戦争を経験していない私が死者数だけをみて「悲惨であった」という言葉を安易に使うことに胸の引っかかりを覚えた。戦時中人々に何が起こったのか、戦渦に巻き込まれる前にどのような生活をしていた人たちが犠牲になったのかを知る必要があるのではないか。6月23日の朝日新聞デジタルによれば、今年迎えた「慰霊の日」では、平和の礎に刻まれた犠牲者すべての名前が読み上げられた。[2]このように「個」に焦点を当てた形で歴史を学ぶこと、事実を「知る」と同時に「触れる」ことが戦争を考えるうえで重要であると感じた。

今年2022年は沖縄が本土復帰50年を迎えた年でもある。節目であるこの年を喜ばしいこととして捉えることができるか。フィールドトリップではむしろ問題点が多く存在することを痛感した。沖縄には米軍基地が置かれており、米軍人・軍属により繰り返される犯罪

[1] 沖縄県平和記念資料館HP平和学習沖縄戦Q&Aより http://www.peace-museum.okinawa.jp/heiwagakusyu/kyozai/qa/q2.html（最終閲覧2022.11.25）

[2] 2022年6月23日朝日新聞デジタルより https://www.asahi.com/articles/ASQ6R357CQ6PTIPE02C.html （最終閲覧2022.11.25）

や、米軍機の事故による近隣住民への被害、騒音や環境問題は顕著である。これらの問題はひとつずつ詳細に見る必要があるが、どれも沖縄の住民の生活に影響を与えていることは間違いない。1972年、沖縄は日本に「戻ってきた」わけであるが、その実態は沖縄に住む人々の生活が脅かされ、苦しんでいるという声が届いていない状況である。届いていない、というのは辺野古埋め立ての現状を聞き、資料ビデオを見た私の感想である。埋め立てに反対している県民は多く、その民意を見ることができるのが沖縄県知事選挙である。沖縄県は辺野古移設に反対の立場であるが、政府とは対立する立場である。反対する市民は、座り込み運動などを行っている。残念ながら今回台風の影響でその現場を見ることはできなかった。辺野古基地問題を考えるとき、政治的な対立のみならず反対運動が訴える内容や行動を見聞きすることが必要だと思った。NPJ共同代表である大畑さんの経験を含め、現地で活動される方の広い意見を今後聞いてみたい。

今回の沖縄訪問は戦争、基地問題（政治/環境/反対運動）、ヤマトと沖縄など様々な問題関心を持つメンバーと議論を交わす機会となった。NPJユースチーム沖縄訪問についてはYouTubeで4人それぞれの感想も含めて紹介しているため、ぜひご覧いただきたい。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

＊Youtubeで配信したNPJカフェ「NPJユースチーム沖縄フィールドトリップ報告会」は以下のリンクからご覧いただけます。

https://youtu.be/xX3YZq38qlE

## 新理事就任あいさつ

理事　徳留　由美

この度 NPJ、非暴力平和隊日本の理事の任を務める事になりました、徳留由美です。NP の活動に共感し参加し、NPJ の会員になってから、早いもので16年が経ちました。

この場をお借りして、少しだけ私が何故 NP の活動に興味を持ち、参加する事になったのかを、お伝えできたらと思います。もしかしたら既に私の講演や発表等をお聞きになった方もいらっしゃるかと思いますが、改めて自己紹介させて頂けたらと思います。

### なぜ **NP** の活動に共感したのか？

私の出身は鹿児島です。鹿児島には第二次世界大戦末期に秘密裏に整備された、元陸軍の特攻基地跡があります。現在その場所は、「知覧平和会館」と「万世平和祈念館」となっております。知覧の平和会館は全国的にもご存じの方が多いかと思いますが、私は個人的には「平和を祈念する」という意味が込められた「万世平和祈念館」の方が、「平和を願う」という気持ちが込められているように感じます。

このような戦争の痕跡を感じる場所が身近にあり、小さい頃から「戦争＝怖い」という感情を持っていました。湾岸戦争が始まり、メディアを通して暗闇の中に光る閃光を目にし、「戦争は今でも起こりうるのだ」と感じました。そして、「戦争にならない為には、どうしたらよいのだろうか？」という思いが生まれました。

大学生の時に「平和学」という学問を知り、もしかしたらこの学問を学んだら何か答えが出るかもしれないと、感じました。そしてご縁があり、韓国の慶熙(キョンヒー)大学・平和福祉大学院の Peace and Global Governance 学部にて、政治学を学ぶことができました。ちなみに私の修士論文は、湾岸戦争時の自分が受けた衝撃を活かし、「The Role of Journalism in Conflict Resolution and Peace Building: Learning from War Journalism in the U.S.」です。

卒業を控え、実際に行動する為には何をすればよいのかと悩んでいた時に、これまたご縁で、理事の奥本さんの講演を聞く事ができ、講演の後に NP の活動を教えて頂きました。

「百聞は一見に如かず」という言葉があるように、私は現場の実情は自分の目で見て感じる事が必要であり、そのような活動がしたいと考えていました。それ故、NP の活動を知った時には、「是非参加したい」と強く感じました。

### **NPJ** の活動参加への経緯

奥本さんが情報を得てから NP について調べていると、日本にも支部がある事に気づき、直ぐに連絡を入れました。その時に現 NPJ の共同代表である大畑さんより、ちょうどケニアでトレーニングが開催されると教えて頂き、直ぐにアプライをし、書類選考及び電話インタビューを経て、無事に参加する事となりました。

2006 年 11 月前半から約 1 か月間ケニアにて行われたトレーニングの後、フィリピン・ミンダナオプロジェクトの先発隊として赴任し、その後スリランカへと赴任しました。

実際に今まで学んできた事や、トレーニングで学んだ事を現場にて実践する際には、現実と理想のジレンマ等もありました。ただ一つ大切にしていた事は、NPの「making space」に繋がる、「現地の人たちの問題は、現地の人たちがお互いに解決する事が大切であり、それが未来に繋がる。しかし、現地の人々には心の余裕（空間）と、お互いに話し合う空間が必要だ。その役割が重要であり、私がすべきことだ。」ということです。

NPJの理事になるにあたり

日本に戻り、NPJ会員として、幾度か講演などをさせて頂き、少しですがNPJの活動に参加させて頂いてきました。NPJが昨年度から開店した YouTube チャンネル「NPJ カフェ」第2回（2021.11. 13）で、現地の活動について話させて頂いていますので、ご視聴頂けたらと思います。

NPJにも新しく元気で若いパワーが、入ってきてくれています。インターンの方達も、本当にNP・NPJの活動を支えて下さっています。個人的事情で現場での活動は現時点ではできませんが、私も少しでもNP・NPJの活動を知って頂く活動ができたらと願います。

最後に皆さまに私の人生訓の一つである、島津のお殿様の言葉を紹介します。この言葉は、常に私の中にあり、今でも自分自身に様々な事を考えさせ、時には背中を押してくれる言葉です。

「いにしへの道を聞（きき）ても唱（とな）へても　わか行（をこな）ひにせすは甲斐なし」

NPの活動は現場での実践型であり、現地の平和を願う人たちの縁の下の活動です。私も引き続き、日本からですが、縁の下の活動を継続できたらと願います。

この度は理事に選出して頂き、ありがとうございます。皆さまと一緒に、平和の架け橋に繋がる活動ができたらと願います。

今後とも、宜しくお願い致します。

*コロンボメインオフィス（スリランカ）*
*右から：リタ・ウェブ、現地スタッフ、筆者*
*＊リタは米国出身で、NPJ 主催の高野山での会議に、出席したことがあります。*
*メインオフィスで、主にプログラムのマネージメント業務を、担当していました。*

*スリランカ人の現地スタッフの女性は、名前を忘れてしまいましたが、笑顔がキュートで、料理が上手でした。*

## ニュースレター編集担当を終えて

理事　大橋　祐治

今年､5 月 25 日発行の 83 号をもって NPJ ニュースレターの編集担当を退任いたしました。7 月に米寿を迎える歳になりましたので時代に沿った編集のために世代交代の丁度良い機会であると思いました。

記録を見ますとニュースレター第 1 号は創刊号と称して 2004 年 3 月 28 日に発行されています。2002 年末の NP、NPJ 設立後 1 年少々､2003 年半ばのスリランカパイロット・プロジェクト発足から半年後でした。当初は年間 6 回発行を目標として、編集担当は確か交替で分担していたと思います。2009 年から発行回数は年 4 回に変更されて現在に至っています。

私は､2007 年 9 月 13 日発行の第 19 号から編集担当として専任することになりました。19 号から 83 号まで、15 年間で 65 回編集させていただきました。振返って感慨深いものがあります。

2007 年当時は NPJ が NP の活動に最も積極的に関わっていた時期ではないかと思っています。スリランカ・プロジェクトで活躍されていた大島みどりさんが任期を終えて帰国され、国内各地で報告会を開催、この年に開始したフィリピン・プロジェクト（ミンダナオ）に参加された徳留由美さんがスリランカの東部、多民族社会（シンハラ、タミル、ムスリム）の地トリンコマリーに派遣されました。この地域では、市民の間に多民族間の紛争予防・解決のための「平和委員会」設立の動きがあり、その為の資金援助の要請が NPJ にありましたので、庭野平和財団のご理解により助成金を頂き支援しました。8 月には「日韓東アジア交流会議」を高野山で開催、NP からも数名の参加がありました。9 月にナイロビで開催された NP 総会には NPJ から大畑共同代表ほか数名が参加しています。

当時の NP の財政は大半が米国市民の寄付によるもので極めて脆弱であったので資金面でも NPJ は NP を支援しました｡2021 年度の NP の活動報告によると要員は 350 名、活動資金は US ドル 20,000,000 とのことです。資金の大半（88 パーセント）は国連の諸機関（UNHCR、UNDP など）並びに西欧諸国の政府系機関の助成金が占めています。NP の目標である UCP（非武装市民平和・保護活動）の大規模な展開にはまだ遠い道のりです。

毎回、編集にあたっては原稿が集まるかと心配しましたが、結果はご存じの通りです。皆様のご協力に感謝する次第です。絶えず心掛けていたことは、出来るだけ頻繁に NP の活動の状況を掲載することによって NP との絆を確認し、少しでも NP への関心を維持することでした。世界各地であからさまな大規模な軍事衝突が起きている情勢下にあって､NP の活動がさまざまな制約（資金面を問わず）を受けていると感じているからです。

長い間のご協力ありがとうございました。

# NPJ　2022年度上期予算・実績（暫定）

2022年11月1日

| 項目 | 22年度予算 | 年度予算備考 | 4-9実績 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 参加費 | | | | |
| 会費 | 500,000 | 21年度実績見込み | 330,000 | |
| カンパ | 350,000 | 2021年度予算 | 188,000 | |
| 沖縄拠点支援カンパ | 0 | | 400,000 | 注1 |
| 雑収入 | | | 5 | |
| **経常収入計** | **850,000** | | 918,005 | |
| 発送配達費 | 75,000 | 注1： | 19,970 | |
| 給料手当 | 240,000 | 21年度実績見込み | 120,000 | |
| 事務所賃貸料 | 60,000 | 21年度実績見込み | 60,000 | |
| 振込料 | 20,000 | 21年度実績見込み | 7,131 | |
| 事務費 | 30,000 | 21年度実績見込み | 12,513 | |
| 旅費交通費 | 75,000 | 注2： | 1,300 | |
| 通信費 | 15,000 | 21年度実績見込み | 6,755 | |
| 雑費 | 6,000 | 21年度実績見込み | | |
| 広報費 | 426,000 | 注3: | 21,450 | 注2 |
| 活動支援費 | 460,000 | 注4: | 390,604 | 注3 |
| 会場費 | 17,000 | 注5:21年度実績見込 | | |
| 講師費用 | 20,000 | 同上 | | |
| **経常支出計** | **1,444,000** | | 639,723 | |
| 当期経常収支過不足 | -594,000 | | 278,282 | |
| 前期繰越剰余 | 220,591 | | 220,591 | |
| **今期経常繰越剰余金** | -373,409 | | 498,873 | |
| 特別収支 | | | | |
| 前記残高 | **857,310** | | **857,310** | |
| 今期支出 | | | | 注4 |
| **特別収支残高** | **857,310** | | **857,310** | |
| 未払金 | 0 | 注6 | 0 | |
| **残高合計** | **483,901** | | **1,356,183** | |

**予算**

注1：ニュースレター年4回（2, 5, 8、11月）発行

注2:沖縄支援費からの振替+予備費25,000

注3：ウエブ管理費3,300ｘ12+α、NPJカフェ50,000、Zoom契約22,000、ウエブサイトリニューアル250,000+50,000（予備費）、リーフレット更新（支出2023年度）

注4. NARPI支援費30,000、沖縄支援費280,000,ユース・グループ活動支援150,000、沖縄支援内訳:大畑航空運賃（沖縄・東京）25,000ｘ4、大畑レンタカー20,000ｘ8+20,000（予備費）

注5:総会イベント会場　　謝礼

注6:NP支援費2019～2021年度分未払分180,000は保留（未払計上から削除）→NPJ財務改善のため

**実績**

注1：沖縄有志からの沖縄拠点活動支援延長カンパ

注2：ウエブ管理費3300/月

注3：沖縄活動支援費（ガソリン代、航空運賃他）310,000、インターン沖縄研修費支援79,324

注4：沖縄支援費20,000/月は活動支援費より支出

## 沖縄報告

共同代表　大畑　豊

１２月２日夕方、ラジオを聞いていると沖縄の防衛態勢をさらに強化するためとして防衛省が陸上自衛隊を増強を検討、作戦を継続するために必要な弾薬や燃料などを集積する機関を沖縄本島に新たに設置することも検討しているとするニュースが流れました。「戦争が近づいている」と思わずゾッとしてしまいました。

同日、自民党と公明党が敵基地攻撃能力の保有を認めることで合意し、それに合わせるかのような発表です。

これまでも政府は南西諸島での防衛力強化を進めており、沖縄では5年前に航空自衛隊の部隊が増強されたほか、与那国島や宮古島に陸上自衛隊の駐屯地が相次いで開設され、今年度末には石垣島での開設も予定されています。

11月10日～19日には全国各地で日米共同統合演習「キーン・ソード23」が実施されましたが、特に沖縄を含む南西諸島では島しょ作戦を織り込んだ大規模演習が行われました。演習に使用される大量の車両や装備品、隊員らを乗せた民間船舶が着いた中城湾港では、民間港の軍事利用化を許さないと、反対する市民らが抗議集会を持ちました。港から移動する自衛隊車両を終結した市民が阻止し、一時迂回せざるを得ない状況もありました。

【中城湾港で抗議する市民】

与那国でも民間空港が使用され、福岡の築城基地から自衛隊輸送機で16式機動戦闘車（MCV）が空輸されました。MCVは陸自の最新鋭の装輪装甲車（タイヤで走る戦車）で、空港から与那国駐屯地まで公道を自走で、市民に見える形で移動させました。県内の公道を走るのは初めてのこととなり、知事も住民に不安を与えかねないと懸念を表明しましたが、無視された形です。住民からは「異様だ」「与那国を戦場にするな」との声とともに「守られている安心感がある」との声も聞かれました。

民間施設や公道を使い、武器が見える状態で走行させるのはその使用を既成事実化するとともに、「やむを得ない」との雰囲気を醸成し、77 年前の沖縄戦のような軍官民共生の地ならしを進めている、との指摘もあります。それを裏付けるかのよう

に、陸上自衛隊が実施した尖閣諸島での対処を想定した訓練に沖縄県警が参加していたり、海上自衛隊と海上保安庁との連携強化が国会で議論されたりしています。
県は民間港や空港の使用に関しては法令に基づいて許可せざるを得ない、と言いますが「沖縄の置かれている環境は他県とは異なる。法令のみならず政治判断で対応していくことも必要」と市民団体は訴えています。

玉城デニー知事は日米安保を認め、自衛隊にも一定の理解を示す立場ですが、その一方で「沖縄を再び戦場にしてはならない」と訴えています。今回の演習については県幹部も「従来と違う」としており、島しょが戦場になることを前提とした訓練であることを認識、「住民保護ができるのか」と懸念を表明しています。

住民保護は

政府は台湾に近い先島諸島などで住民用避難シェルターの整備を検討し 2023 年度予算概算要求で、シェルターに関する調査費を計上したことが明らかになりました。これは戦争を前提としており、許すわけにはいきません。そもそも全住民を収容できるシェルターなどできるわけもありません。その間の食糧確保もどうするのでしょうか。

有事における住民保護は自衛隊ではなく、各都道府県と市町村が実施することになっています。石垣市の計画では全住民を避難させるには 1 日民間機 45 機運用するとして延べ 435 機、約 10 日間必要となり、宮古島も 363 機、フェリーだと 109 隻必要となります。有事がせまる中、それだけの航空機、運搬船が確保できるのか、またその輸送に安全が確保できるかもわかりません。

沖縄戦においては、住民は避難豪から追い出され、疎開船も撃沈されました。

まやかしの避難態勢ではなく、戦争をさせない外交こそに政府は知恵をしぼるべきです。「沖縄を二度と戦場にさせない」イコール日本を戦場にさせない、その思いは全県民、全国民一緒だと思います。

塩川港で集中行動

11 月 21・22 日に半年ぶりとなる塩川港での集中行動が「塩川デイ」として取り組まれました。知名度の低い？塩川での行動を広め、これをきっかけとして塩川にも来てもらいたい、との思いです。普段は数人、多くても二桁はいかない人数でやってますが、この日は最大 100 人ほどきて、賑やかになり、搬出台数もかなり減らしました。人が来れば止められます！

【塩川デイで抗議する市民】

Nonviolent Peaceforce

非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援してくださる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申込みは、**郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本のウェブサイトの入会申込ページ**をご利用くださいますようお願いいたします。

**◎正会員（議決権あり）**
- 一般個人：10,000円
- 学生個人：3000円

**◎賛助会員（議決権なし）**
- 一般個人：5000円（1口）
- 学生個人：2000円（1口）

＊ 団体は正会員にはなれません。 ・ 団体　　：10,000円（1口）

■ **郵便振替**：00110-0-462182　加入者名：**NPJ**
＊通信欄に会員の種類を（賛助会員の場合は口数も）ご明記ください。

■ **銀行振込**：**三井住友銀行　白山支店　普通　6622651**　口座名義：**NPJ代表　大畑豊**
＊銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

■ **ウェブサイトからのお申込み**：http://np-japan.org/4_todo/todo.htm#member

夏季カンパありがとうございます。今年2月から30名の方から合計635,000円のカンパを頂きました。新型コロナが続く厳しい状況の中、ご支援に感謝いたします。（敬称略）

大谷義彦、前田惠子、安藤博、大畑豊、大橋祐治、福崎裕夫、馬渡雪子、柳康雄、高柳博一、中村雄介、君島東彦、川辺希和子、鬼塚賀津子、山本賢昌、大石裕子、大島みどり、本東宏、野島大輔、幡掛なつみ、石田明義、遠峰喜代子、後藤由美子、宮田光雄、日置祥隆、飯高京子、徳留由美、宇井志緒利、酒井良治、高瀬紀子、清原雅彦、尾崎秀子

今号は大橋さんに代わりまして大畑が担当しました。改めて大橋さんのこれまでのご苦労に感謝いたします。巻頭言の青山さんの指摘は、私たち「平和」を目指し活動する人たちに何ができるのか、重い課題を突き付けていると思います。NPはウクライナにおいて地元の女性シェルター、学生グループ、人権活動家らと協力し、2月以降およそ200人の避難を支援し、80人以上に護衛的同行を提供、法的機関や医療機関へとつなげました。今後も支援の届かない地域と支援機関をつなげる活動を展開していきます（表紙写真）。NPJユースツアーでの若者たちとの交流は私にとってもいい刺激となりました。NPでの活動経験のある徳留さんが理事に加わり、君島共同代表は国際理事に復帰しました。ともに今後の活躍を期待したいと思います。（O.Y）